大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

<論文>阪神淡路大震災・働く被災女性公務員(管理職)の手記分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤田, 正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011307

論　文

阪神淡路大震災・働く被災女性公務員(管理職)の手記分析

藤　田　　正

はじめに

本分析では被災地（神戸市）の地方自治体で働く女性公務員管理職が震災後に書いた手記を分析するが、その目的は阪神淡路大震災での行動、発揮された知恵を抽出し、今後の防災に役立つヒントを得ることにある。

震災は間違いなく非日常の出来事である。「日頃していないことを非常時にすることは出来ない」。大震災後に数多く語られた教訓である。が同時にこの言葉は、震災という非日常性が日常性に潜む問題を顕在化させたことを意味した。つまり、震災前に先送りにしていた問題に否応なしに直面する事態が起こったのである。いうまでもなく地震は公人であるとか私人であるとかの社会的区別をして襲ってくるわけではない。被災の程度に差はあるが被災地に住むすべての人を襲う。このことが被災地に住む多くの公務員を援助を必要とする被災者とした。が、同時に、彼等にはまさに公務員として市民生活の支援・復旧・復興の公的援助者としての役割が強く期待された。こうして彼等は「被援助者・援助者」という二つの立場が並立する状態におかれ、この並立状態の中で強い公私間役割葛藤を体験する。「公とは、私とは」という問題が改めて突き付けられたのである。震災後に出会った多くの公務員の方々がふと漏らす言葉のはしばしにこの悩みがあらわれていたが、女性地方公務員管理職の場合、より如実であったように思う。というのは、周知のように「地方・中央」の連携がほとんど機能しない事態のなかで管理職という職責が自らの公的役割を強く意識化させ「公とは」の悩みを深めた。一方、現在の日本社会において払拭されているとは言い難い「女性が家事・育児を担う」とする従来の一般通念的規範があり、それが私的役割を意識化させた。つまり、女性管理職公務員は、

女性、管理職、地方公務員などの属性が複合しあい、先送りにしてきた問題が顕在化するなかで強い葛藤を体験したと考えられるのである。このことが、女性管理職公務員をとりあげた理由である。

さてこのように、震災は公務員の公私間役割葛藤をあらわにする事態をもたらした。お互いが顔見知りで一旦コトがあれば、その地域に住まう顔見知りの人々が公的役割を分担しあうムラ的な風土があれば、この葛藤は緩和される可能性を持つ。が、ここでとりあげる神戸はマチである。いうまでもなく、マチとはある地理的地域を越えて多くの人が交流することを通して成立する生活空間であり、お互いは必ずしも顔見知りではなく、ましてや個人的事情に通じ合っているわけではない。つまり、震災後の活動において「知り合う」ことから始めなければならなかったのである。が、「隣りはなにをする人ぞ」がマチに住まう人の行動を支えてきたことも事実であり、「昨日までのマチ人が今日から即ムラ人」というわけにはいかない。このことがマチの行政活動への期待を一層高める。なぜなら、行政とは救助、避難、ライフライン、生活支援などの正に「公」的側面を担っている社会組織だからである。が、信じられないような壊れ方をした公共施設の多さ、役立つ情報が的確に流されない、などなど国、地方行政の責務が問われるべき問題が頻出した。総じていえば、震災後にわが国の現代都市生活における様々な問題が露呈された。こう考えると、マチという特性を持つ神戸という土地柄もまた地方公務員の公私間葛藤を促進したと言え、この事態に直面した女性管理職公務員の手記にかかる問題を解決するヒントが含まれている可能性があると考えたのである。

本論文で考えたいのは被災公務員として起こったであろう公私間葛藤である。公務員の「公（オオヤケ)」とは「オオキナイエ」の意味であり、それに対比して家庭は「チイサナイエ」とされる（三戸 1982、藤田 1993)。この対比からまず二つの構造が考えられる。その一は、図1に示すような「オオキナイエ」が「チイサナイエ」を含む包摂構造で、その二は図2が示すような「オオキナイエ」と「チイサナイエ」が独立する独立構造である。そこで次に個人をイエとの関わりでどこに置くかを、個人がイエに含まれるか否かに二分して考

えてみる。最も分かりやすい構図は、図1-1に示される「オオキナイエ」が「チイサナイエ」を含み、さらに個人を「チイサナイエ」が含む構造である。この個人の位置を動かすと、個人は「オオキナイエ」には含まれるが「チイサナイエ」には含まれない図1-2、個人が「オオキナイエ」にも「チイサナイエ」にも含まれない図1-3の構造が得られる。次に、「オオキナイエ」と「チイサナイエ」が独立する独立構造だが、個人が「オオキナイエ」にも「チイサナイエ」にも含まれない図2-1、個人が「オオキナイエ」には含まれるが「チイサナイエ」には含まれない図2-2、個人が「チイサイイエ」には含まれるが「オオキナイエ」には含まれない図2-3の三つの構図がある。

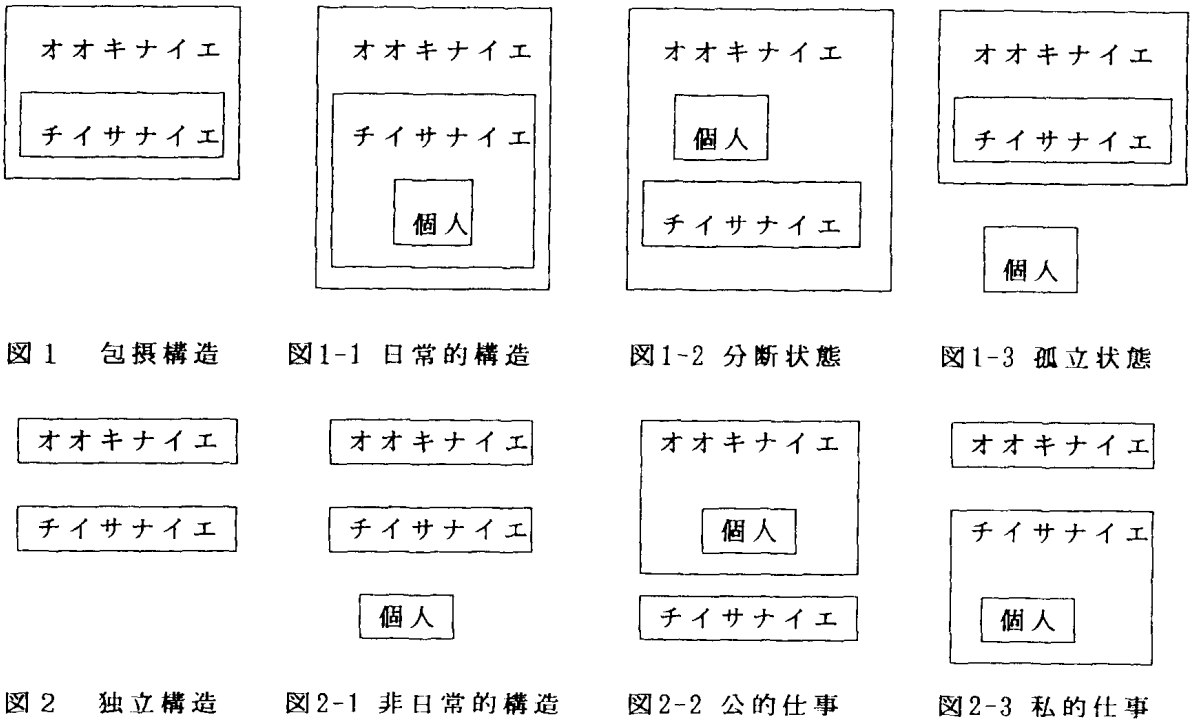

図1　包摂構造　図1-1 日常的構造　図1-2 分断状態　図1-3 孤立状態

図2　独立構造　図2-1 非日常的構造　図2-2 公的仕事　図2-3 私的仕事

図1・2　公務員の公私関係

ここでいう包摂・非包摂のベン図的関係は関与・非関与を示したものだが、「チイサナイエがオオキナイエを」、「個人がチイサナイエもしくはオオキナイエを」含む関係は今回は議論していない。さて、図1-1は、「オオキナイエ」、

「チイサナイエ」、「個人」が相互に関与しあっており、これが日常的構造である。反対の非日常的構造は図2－1に示されるが、「オオキナイエ」、「チイサナイエ」、「個人」は相互に関与しあわない。この事態が震災直後に起きたわけで、ここでは各人は自らの命を守る行動を最優先する。とすると、図2－1から図1－1への過程が復旧・復興過程ということになるが、今回の阪神淡路大震災のような大規模災害の場合、この過程は非常に長く、被災公務員は強い葛藤を感じた。その最も典型が「チイサナイエ…私的仕事」と「オオキナイエ…公的仕事」とのいずれを優先するかという葛藤である。図2－3が家族の安否確認を含め私的仕事を優先した場合で、図2－2が公的仕事を優先した場合である。この両者を図2－1から一挙に共に実現できれば問題はないのだが、現実的にはこのいずれかを優先させることが求められた。さて、図2－1から図2－3への流れには「(A)チイサナイエが個人を包摂する」、図2－1から図2－2への流れには「(B)オオキナイエが個人を包摂する」の関係が必要である。が、もうひとつの「(C)オオキナイエがチイサナイエを包摂する」関係がある。この関係が図2－1から起こった場合、それは図1－3として表現され、個人はオオキナイエともチイサナイエとも関与し合わない孤立状態といえよう。では、残りの図1－2はどのように考えられるだろうか。この関係は、「チイサナイエ」と「個人」は関与しあってはいないが、その両者はともに「オオキナイエに包摂されている関係」である。具体的にいえば、被災者が避難所で家族を探している状態、または被災した公務員が十分に家事ができないままに公務に従事している状態などである。そこで図1－2分断状態となづけておこう。

さて、復旧過程の中で図1－3孤立状態と図1－2分断状態のいずれが先に起きるかを考えれば図1－3孤立状態が先にあり、図1－2分断状態は後にある。この変化をもたらしているのは「(B)オオキナイエが個人を包摂する」の関係であり、さらに図1－1の日常的関係にいたるには「(A)チイサナイエが個人を包摂する」ことがなければならない。そして、図2－1非日常構造から図1－3孤立状態には「(C)オオキナイエがチイサナイエを包摂する」が必要である。つまり、図2－1、図1－3、図1－2、図1－1の順におこる過程では(C)，(B)，(A)の

順の包摂関係が必要である。三種の包摂関係が必要なのは定義上当然のことだが、次に、図2-2公的仕事、図2-3私的仕事の場合を考えてみよう。というのは、この両者ともに図2-1、非日常的構造から起きる事態であり、図2-2公的仕事の場合には(B)が、図2-3私的仕事では(A)の関係が必要である。ゆえに、図2-2から図1-1に移行するには、(A)および(C)の包摂関係、図2-3から図1-1へ移行するには(B)および(C)の包摂関係が必要である。が、この両過程には差がある。つまり、図2-3から図1-1では、「(C)オオキナイエがチイサナイエを包摂」した時、すでに「(A)チイサナイエが個人を包摂」しているので「(B)オオキナイエが個人を包摂する」ことは同時に起こる。が、図2-2から図1-1では「(C)オオキナイエがチイサナイエを包摂」したとしても「(A)チイサナイエが個人を包摂する」ことが起きるとは限らない。つまり、(A)の関係が独自に起きなければならないのだが、このことは図2-2から図1-2、そして図1-1への移行を示している。これらの流れを図3に示した。当然のことなのだが、図1-1にはあるが図2-1にはない三種の包摂関係がいずれの流れにも必要であるが、非日常的関係から踏み出した第一歩目の性質によって必要とする包摂関係の順番が異なってくる。つまり、日常的構造の復活には複数の道があり、このことが震災後の仕事を行うことを困難にしていると考えられるのである。

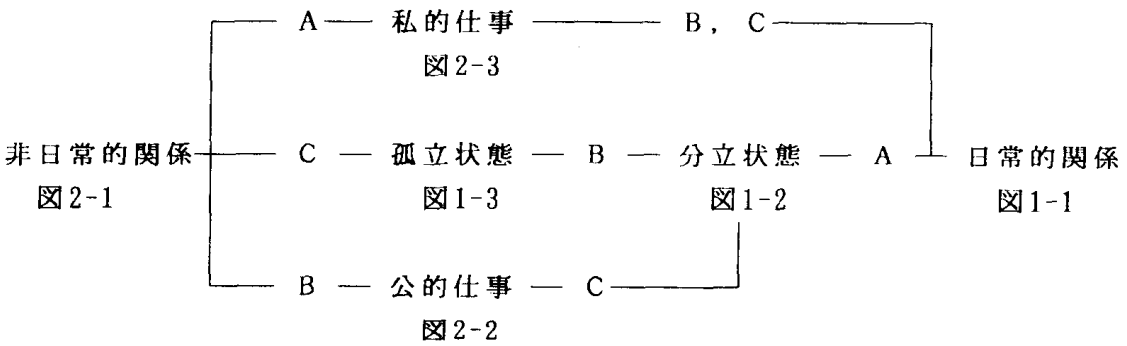

図3　仮説される推移

そして、図2-2公的仕事、図2-3私的仕事から図1-1日常的関係への移

行において、図3では示していない関係が生じる。それは「オオキナイエ」と「チイサナイエ」は重なりを持たないが、ともに個人を含む構造である（図4）。

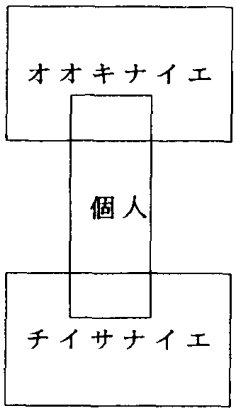

図4　また裂き状態

ここにおいて個人はまた裂き状態に陥るが、それは図2－2公的仕事に「(A)チイサナイエが個人を包摂」する関係が、図2－3私的仕事に「(B)オオキナイエが個人を包摂する」関係が、「オオキナイエ」と「チイサナイエ」が重なりを持たない状態で起きた場合である。つまり、図2の独立構造が残っている場合、被災公務員はこの「また裂き状態」が示す公私間葛藤を強く体験する。このことは図2－2公的仕事、図2－3私的仕事から図1－1日常的関係への移行がそう簡単ではないことを示すが、本研究ではかかる「仮説される推移」を基本的に設定し、そこでどのようなことが具体的に生起し、復旧の過程で生じた葛藤をどのようにして処理していったかを検討する。いうまでもなく、彼女らが勤めるのは地方自治体である。田尾雅夫（1990）は、地方自治体に関して詳細な検討をした上で、ゼネラリストを超えたポリティカル・マネージャーとしての資質が地方自治体の管理者には要請されているとし、1）状況変動を認識する能力と迅速に対処できる能力、2）情報システム化のためのコミュニケーション・ネットワークを作ること、3）任せられるスタッフの育成、4）状況を構築する姿勢を前向きに持続すること、が必要としている。ここにあげられた点がまさに震災時には急務とされたのである。が、同時に家族の安否、非日

常事態での育児、介護、家事、などなど自らの生活の基盤を立て直すことも、他の被災者同様に急務となったのである。そうして「また裂き状態」になり、その公私間葛藤を解消するには個人がその事態を踏ん張り、乗り切るしかないが、それは容易なことではない。スローガンではない、明確に公私との関係を位置付けた個人の自立が不可欠となる。なぜなら、個人によって「オオキナイエ」と「チイサナイエ」が結びつけられているからである。換言すれば図1、2で出発点とした「オオキナイエ」と「チイサナイエ」の包摂・独立構造における「個人」は、「オオキナイエ」・「チイサナイエ」のいずれかもしくは双方に含まれるか否かであったが、「また裂き状態における個人」は反対に「オオキナイエ」・「チイサナイエ」のいずれかもしくは双方を能動的に含む可能性を持っており、個人を中心軸とした構造成立の可能性が示唆されるのである。藤田(1996)は、そのためには単なる孤立とは異なる「孤の自覚」の必要性を指摘しているが、彼女らが体験した孤独の深さは想像に難くない。以上述べてきた過程を想定しつつ彼女らが体験したこと、感じたこと、考えたことを整理し、そこから得られる震災の教訓を具体的に抽出できればと願う。

分析方法

本研究で用いる資料は、神戸市に勤務する女性管理職（一般行政職・社会福祉職）及びそれに準ずる女性職員を会員とする『ベルの会』が震災後出版した、「こすもす特集号　阪神大震災の記録　あしたへ　1996年1月17日発行」である。53名の会員のうち32名が1995年10月に実施したアンケートに回答している（但し、「思い出したくないから回答しない」「整理できていない」とする人も含む人数である)。アンケートのみではなく9名の手記、7名による座談会、震災で亡くなった会員への追悼文も収録されている。手記、座談会の発言を分析対象とするが各人、記述・発言形式が異なっているので、それらの文章を以下の要領で一定の形式にする。まず、「起こった事→（喚起された気持）→結論」の流れに整理し、さらに結論を、問題、解決行動、教訓・目標に分類する。ここで教訓・目標とは、震災からの立ち直りにおいて必要とされる諸行動のま

とめをしたものであり、解決行動とは実際に具体的に行われた行動である。これら三種の資料をもとに分析するが、結果の表示においてはアンケートは＋印、手記はａ～ｉ，座談会はｚの記号を付記する。

分析結果

1）地震直後

まず地震直後の状況を示した記述を抜き出す。

起こった事→	（喚起された気持）	―――――→結論 問題	解決行動	教訓・目標
（地震）				
ａ本震	ナンダコレハ？	家屋内避難	安全な玄関に	＊驚き処理
ｄ本震	二日酔いだ。	「助けて」	子供布団でくるむ	＊応急防災
ｂ本震		暗闇	懐中電灯	＊応急防災
ｂ本震		噴出す水	止水栓操作	＊応急防災
ｂ本震		足をケガ	スリッパ、救急薬	＊応急防災
ｈ本震	永遠に続く恐怖			＊恐怖処理
ｉ本震	暗闇の恐怖		外に避難	＊暗闇恐怖処理
ｚ余震	怖い			＊余震恐怖処理
（街の崩壊）				
ｂビル崩壊	血の気失せる			＊震災確認
ｃ傷んだ街	目を疑う			＊震災確認
ａ擁壁崩壊	自然の凄さ	土木事務所に、	公衆電話で連絡	＊被害報告
（避難行動）				
ｂ鉄筋壊れぬ			避難考えず	＊自宅避難
ｈ火の海		避難		＊避難行動
ｉガスの匂い	動転	避難	鍵も掛けず	＊避難行動
ｉ一階がない		避難	パジャマのまま	＊避難行動
ａ危険な家		実家に避難	友人の助け	＊避難場所
ｉ危険な家		施設避難	近くの会館	＊避難場所
ｉガス爆発		避難命令	ヒッチハイク	＊二次避難
（救出行動）				
ｈ「助けて」の声		救出	近所の協力	＊救出
（震災情報）				
ｂ被害状況	不明	情報欲しい	ラジオニュース	＊震災情報
ｂ防災連絡来ず	気になる	上司に電話	待機指示	＊被災把握
ａ家が孤立		電話不通	徒歩で連絡	＊被災連絡
（家族被害）				
ｉ家族被害		安否確認	家に戻る	＊家族安否
ｈ家壊れる	ゴミの山	片付け不可能	脱出	＊被災確認
ｚ家被害		後で気付く		＊被災確認
ａ家財散乱		食事なし	残りの御飯	＊家庭内備蓄
ａ		水なし	昨年購入の水	＊家庭内備蓄
ａ		火なし	昨年購入のストーブ	＊家庭内備蓄

ここにあげられた地震、街の崩壊、避難行動、救出行動、震災情報、家族被害などの記述は今回の震災における被災者としての体験を如実に示している。が、公務員としての特徴はない。つまり、いうまでもないことだが、彼女ら公務員も被災者であった。応急防災・家庭備蓄などの震災以前での準備、震災確認・被災程度などの震災情報、家族安否・救出・避難などの避難行動、暗闇・余震などからくる恐怖感の処理、といった教訓もしくはこれからの目標が提起されているが、これらはいづれも今回の震災後盛んに注意が喚起されたことである。

2）家族と仕事

では、「家族か仕事か」の葛藤は生じただろうか。

起こった事−→（喚起された気持）−−−−−−−→結論	問題	解決行動	教訓・目標
z職場or家族	出勤か欠勤か	判断迷う	＊公務員とは
z出勤要請	出勤	夕方到着	＊震災時勤務
＋出勤日　震災当日14名、翌日10名、一週間以内8 名			
z職場or家族	火事	出勤不可能	＊災害時欠勤
z職場or家族	家護る	本震日欠勤	＊後ろめたい
z職場or家族	家護る	欠勤	＊クビ覚悟
z職場or家族		出勤	＊気が楽
z職場or家族	家族介護	日勤のみ	＊孤立感

32名中14名が本震当日出勤しているが、本震日の欠勤は「クビ覚悟、後ろめたい」と感じている。そして、出勤をすると「気が楽」になる。が、家族介護のため日勤のみをすると「孤立感」がある。ここにはあきらかに「家族か仕事か」の公私間葛藤が示されている。

3）出勤

では、どのようにして出勤したのだろうか。出勤後の家族の世話・水汲み・補修など自らの家のこと、出勤手段など、が具体的に起こった課題であった。

起こった事－→	（喚起された気持）	－－－－－－－→結論		
		問題	解決行動	教訓・目標
（出勤後の家族の世話、水汲み、補修）				
z帰宅月一回		家事	夫・親・子供	＊家事分担
z家事		家族会話減	母が苦労	＊家事分担
z家事育児		家族介護	保育所	＊支援体制
＋子供の世話…夫の親・２、自分の親・３、夫・１、				
＋老親の世話…妹・１、母・１、親族・１、				
＋水汲み、連絡、補修など…家族・２、子供・４、夫・３、自分・２、兄弟・１、				
近所・２、大家・１、友人・１、出来ず・３、				
（出勤困難）				
g職場孤立	遠い	通勤	毎日徒歩	＊交通手段
d渋滞の道		途中まで車	同僚と一緒に	＊出勤手段
b出勤方法		出勤	自転車・単車	＊出勤手段
b液状化の道		自転車断念	徒歩	＊出勤手段
f液状化の道		ほこりっぽい	マスク	＊出勤装備
b物資支援	食糧・水なし	物資運搬	リュック、カート	＊物資運搬
h職場被害		職場行けず	近くに出勤	＊出勤先変更

出勤をするためには、家庭、家のことを処理しなければならないが、大部分の人が家族の協力でなんとか出勤している。また、近所の人、大家、友人などいわゆるコミュニティの支援のもと出勤した人も結構多い。が、震災前の交通手段は使えず、徒歩、自転車、単車が利用され、職場に食料、水を運搬するためのリュック、カートが用いられた。これらはいわば震災前の手段に比して、個人が所有する小型なものである。つまり、被災者は自らの工夫によって出勤手段を確保した。家族協力、コミュニティの支援、出勤方法の工夫、物資運搬方法の工夫などの教訓があげられているが、興味深いのは震災前の職場に行けない場合、出勤先を変更している人がいることである。この動きはいわゆるタテ割りの行政組織を突破するものであり、緊急時にはかかる対応をすることが認められてよいのではないだろうか。ただし、この動きを支えるためには緊急時の情報ネットワークが十分に機能している必要がある。

4）職場被害

職場も震災被害を蒙った。その状況はどうだったのだろうか。

起こった事→	(喚起された気持)	―――――→結論 問題	解決行動	教訓・目標
(非常事態)				
ｃｄ職場散乱	ただ呆然			＊職場の状況把握
ａｉ職場混乱	秩序・情報なし			＊職場秩序回復
ｂ職員出勤	２５％	職員安否不明	安否確認	＊職員安否確認
ｆ通常業務停止	何をすれば？	方向性見失う		＊業務停止
ｂ大量業務発生		目の前処理	夢我夢中	＊災害救助
ｚ大量業務発生		分担できず		＊業務分担
ｚ上司倒れる		大変	倒れると退ける	＊フォロー
ｆ財源大幅減	不安	ポスト整理	当然と思う	＊リストラ

建物の被害だけではなく、震災は職員、情報網などそれまでの仕事を支えてきたものも破壊された。被災した公務員はその立て直し業務につく。が、方向性不明のままでの大量業務が発生し、危機管理が必要な事態が生じたが、それに対応できていたとは言えない。職場の状況把握、業務分担、フォロー体制などいわゆる組織秩序の回復が目標となっているが、「(病気・ケガ) で倒れると退ける」という思いは痛切であり、ポスト整理が行われ、リストラが起こることの予想が不安を喚起している。つまり、目前の大変さに加えて将来的な見通しもなくなっている。

(仕事の内容)				
ｂ多くの遺体	身体が凍る	柩づくり		＊遺体業務
ｃ遺体業務３日		火葬手配	倉敷に依頼	＊葬祭
ｃ遺体業務３日		遺族対応		＊対遺族
ｂ救命依頼		出来ず	消防に連絡のみ	＊緊急救命
ｂ高齢者		救出老人	ホームへ	＊搬送
ｂ障害者		緊急入所	受入れ依頼 付添い	＊社会的弱者への対応マニュアル
ｂ救援物資搬入		体制とれず	人力、不眠	＊物資マニュアル
		食事配分	工夫	＊配分マニュアル
ｚ市民対応	怒鳴られる			＊対市民
ｉボランティア	新聞沙汰？	孤立無援		＊対ボランティア
ｚボランティア		調整		＊対ボランティア

地震後３日は柩づくり・火葬手配などの遺体業務、高齢者・障害者など社会的弱者の救出、大量の救援物資の搬入と配分、市民・ボランティアへの対応など非常時業務が中心である。が、これらすべての非常時業務は始めてであり、「身体が凍る」が典型的なようにたちすくんだといえる。そこで遺体業務、緊

急搬送、対市民、社会的弱者対応、対ボランティア、物資、配分など多岐にわたる業務のマニュアル化が提案されている。が、これらの非日常業務のすべてを全公務員が行い得るようにするというのは現実的ではない。特に専門能力を要する非常時業務には専門家が必要である。専門的に行う人々をプールしておき、そこに連絡する方法を確保しておくことの方が現実的であり、組織効率の面からみても無駄が少ない。例えば、次にあげる救命救急、医療、保健は高度な専門性を必要とする業務である。

（避難所医療保健）

e救命	薬など不足	トリアージ	＊トリアージ
e避難所医療	救護活動	出勤職員・応援医療	＊医療体制
eケガ人多数	夜の手術	懐中電灯	＊緊急救命
eケガ人多数	搬送	大阪まで歩いて！	＊緊急搬送
e心のケア	ニーズ少ない	効率的実施方法	＊偏見の除去
c精神保健活動	心の相談	応援医師	＊日常生活の回復

トリアージとはその場面で使用しうる設備、機器、薬品などを考慮して患者を区分し、できるだけ多くの人を救おうとすることであるが、これを実現するには高度な知識を持つ専門家が必要である。トリアージは医療のみではなく建築士による住宅の被災度判定においても行われた。このように明確に専門性を必要とする業務については専門家集団を準備しておくことが必要である。「心のケア」についてのニーズは初期段階では少ない。が、日常生活を回復する過程での応援医師などによる支援が提案されている。

（仕事の仕方）

z最初一週間		個人判断	感じ方の差	＊瞬時の判断
z少し経って		専門性格差	保健婦・看護婦・医師＞行政職	＊専門職
z情報網	fax 溜る	配る人いない		＊非常時連絡
z現実業務		他仕事見えず	他に配慮できず	＊係間協力
z区役所	女性多い	未経験業務	女性が戦力	＊非常時業務
z福祉事務所		多い遺体業務	本来業務出来ず	＊役割分担
z民生局		多い物資業務	本来業務出来ず	＊防災計画問題
z民生局		業務混乱	事前に業務区別	＊社会的弱者
z応援職員		所属格差	応援職員との格差	＊応援とは

最初一週間の仕事は個人の瞬時の判断に大きく依拠していたが、少し経つと保健婦、看護婦、医師など専門知識を持つ人の働きが重要となる。このことは

非常事態におけるゼネラリストとしての行政職の機能の見直しを示唆するが、情報網が機能しなかったことが典型的に示すように役割分担、応援職員を含めての業務分担ができていなかった。その最も大きな理由は即座に行動しうる防災計画が不明確であり、未経験業務への見通しが弱かったことである。これらのことから非常時における業務分担の仕方への問い直しが提起されているが、それは固定的であってはならず、動態的な動きが可能なものである必要がある。

（宿泊など職場の生活）

f 防災指令		宿泊勤務	宿泊	＊ローテーション
＋宿泊勤務について　当然　17人、何も感じず 4人、せざるを得ない 7人、嫌 0人				
z 宿泊勤務		課で異なる		＊縦型組織見直し
＋宿泊勤務したか？　はい　28人、いいえ　4 人				
z 宿泊ローテ		格差発生	管理職全員宿泊	＊フォロー体制
z 宿泊ローテ			全壊者も宿泊	＊宿泊
f 宿泊ローテ			宿泊免除	＊宿泊
＋被災による職場配慮　あり　14人、なし　17人				
z 宿泊方法		寝場所	男女一緒	＊宿泊方法
		寝具	段ボール・毛布一枚	＊宿泊方法
e 職場の生活		睡眠	２、３時間	＊睡眠時間
e 職場の生活		食事	一日お握り一個	＊食事
z 職場の生活	風邪をひく	不安	息も絶えだえ	＊健康

防災指令に基づき宿泊勤務などが行われ、男女一緒の寝場所、段ボール・毛布一枚の寝具、２、３時間の睡眠時間、一日一個のお握り、風邪をひくなどの状態での勤務となる。この宿泊勤務が嫌と答えた人は皆無だが、課によって異なっており、格差が生じている。被災による職場配慮もどうやら統一的には行われなかったようだが、有効なローテーションを組む必要があるが、そのための縦型組織の見直しが提起されている。

（男女差）

z 非常時業務		計画段階	女性当てにされず	＊男女格差
z 区役所	女性多い	未経験業務	女性が戦力	＊非常時業務
z 現実業務	２週間	ローテ格差	男女格差なし	＊男女格差
z 現実業務	１か月	格差つける	外は男、内は女	＊男女格差
z 肉体労働		女性免除		＊女性配慮
z 女性差別		顕在化	女性に当たるな	＊男女格差
z 女性業務配分		クレーム	気を遣う	＊女性間格差
z 男女格差	活動差指摘	ショック	個人差では	＊要事情評価
z 現実業務		能力格差	仕方なし	＊能力格差

計画段階では女性は当てにされていなかったが、未経験業務とはいえ多い女性が戦力となった。ことに震災後2週間ほどは男女格差はない。が、1か月ほどすると「外は男、内は女」「肉体労働女性免除」などの状態が生じた。これを根拠とする女性差別的言動がその後顕在化するが、個々人の事情、能力などを評価して対応すべきことが提起されている。

（管理職として）

z 被災管理者	出勤遅れる	申し訳なさ		＊公私間葛藤
e 職員の被災差		公私間葛藤	ただ励まし合う	＊公私間葛藤
z 大量業務	手当たり次第	管理意識無し	目の前処理	＊管理職とは
z 身体能力	出しきる	頭使わず	反省しきり	＊知恵活用
z 情報無し	手探り		全て事務所判断	＊非常時情報
z 業務情報	大量	情報混乱	自己完結システム	＊情報処理
z 情報網		複写機・tel なし		＊非常時連絡
z 部下把握	精一杯	情報把握のみ		＊職場情報網
z 部下家族被災		出務要請	配慮できず	＊部下配慮
z 市民対応		市民巻こむ事	リーダシップ	＊行政職とは
z 市対応遅い	腹立ち			＊行政とは
z 業務情報		リーダ多忙	判断できず	＊権限委譲
z 大量業務			みんな管理職	＊自己判断
z 大量ニーズ		最重要ニーズ		＊マンパワー
z 部下応援に	距離発生	課ばらばら		＊職場再編
z 職制枠	組み込まれた	処理できず	フリーな立場	＊非常時職務
z 応援業務		指導力未発揮	後方支援	＊応援体制
z 待機体制			ボランティア容認	＊職員活用
z 命令系統不明	判断できず	上司の動き	参考になる	＊知恵の伝達
z 職務系統化	困難	整理	頭使う	＊事前準備
z 業務判断		情報整理	遊軍作る	＊全体把握
z 業務判断		情報整理	庶務動くな	＊全体把握
z 業務判断		情報整理	全員一部屋制	＊意思疎通

被災で出勤が遅れたことに「後ろめたさ」を感じ、被災した職員と「ただ励まし会う」。ここには公私間葛藤があるが、頭は使わずに身体を動かして目の前の大量業務を処理することに精一杯であった。さらに、情報がない、情報機器が使えない、混乱したままの大量情報に振り回される。このような場合、多くの人手が必要だが職員の安否確認をすることに精一杯で、家族が被災した職員にも出勤要請をし、出来るだけのマンパワーを確保しようとした。市民を巻き込む行政職としてのリーダーシップが求められたが、リーダー多忙で「みんなが管理職」といった状態となった。最重要ニーズの把握が肝心なのだが、課員バラバラのまま、従来の職制枠が働き、非常時業務をこなすための職場再編

が遅れた。具体的には応援業務、待機体制の確立が必要なのだが、命令系統不明確で、個別的に上司の動きを参考にせざるを得なかった。かかる事態に落ちこまないためには、事前に非常時職務の系統化を想定しておくべきであった。が、全員一部屋制で意思疎通を図る、フリーな立場の人を作り全体把握することなどの試みもなされた。ここでは非常時における組織再編という管理職がなさねばならない課題が提起されているが、いくつかの有効な試みがあり、それらに秘められた知恵を明確にしておくことが肝要であろう。

（意見反映）

z計画		どう実現	自分の仕事	＊震災報告書
z仕事手一杯	余裕無し	考える間なし		＊余裕の創造
z復興計画	予算獲得	時間制約		＊要発想転換
z自分の仕事	反映された	限定	大きな視野	＊視野の拡大
z反映されず		前倒し実施	提言の機会	＊提言の機会
z反映されず		従来路線		＊違った視点
z反映不十分		ハード重視		＊ソフト重視を
z計画読めず		福祉充実必要		＊余裕の創造

震災における非常時業務の体験を活かすためには、復興計画の実現を自分の仕事としてとらえることが要る。が、仕事が手一杯で考える余裕がない。意見反映については、された、されずの両意見があるが、いずれも今までとは違った、大きな視野、ソフト重視への発想転換が必要としている。が、全体的にはまだ抽象的・総論的で、具体的施策にはなっていない。それは地震後九ケ月ほどでは未だ日々の震災業務を振りかえる余裕は生じていないからであろう。

5）自分の仕事と心のケア

起こった事→	（喚起された気持）	―――――→結論 問題	解決行動	教訓・目標
（自分の仕事）				
#一週間	ハイな気分			＊非日常的情緒
z友人のtel	しらじらしい	ギャップ	怒鳴りあう	＊ストレス発散
z仕事		しんどい	子供と話す	＊精神的支え
#一ケ月後	仕事落着く	気分落込み		＊落ち込み
＋二ケ月間仕事量変化	多く	22 人、無変化 6人、少なく 3人		
	厳しく	22 人　無変化 6人、少なく 2人		
＋仕事変化は	つらい	9人　感じず 5人　当然 13人		

＋体調変化　　あり　13人　　なし　14人
；精神的疲労　　増加　23人　　なし　4人
z六ケ月後　　忙しい　　振返る余裕なし　　＊バーナウト気味
z住宅業務　　4月より繁忙　　＊バーナウト気味
z能力格差　　評価上がった人　　＊非常時能力
f リストラ　　職種変更　　教えて貰う　　＊新しい能力
f 時間外勤務　　育児に支障　　＊家庭と仕事

地震一週間ほどは非日常的なハイな気分に襲われ、友人からの見舞いの電話もしらじらしく聞こえる。仕事はしんどいが子供との会話が精神的支えとなった。一ヶ月後には仕事も落ち着いてきたが、二ヶ月の間に仕事量は増え（22人／31人)、厳しくなった（22人／30人)。が、それは当然とする人が最も多く（13人／27人)、つらいとした人（9人／27人）がそれに続く。かかる仕事変化によって体調を崩し（13人／27人)、大部分の人が精神的疲労に見舞われた（23人／27人)。六ヶ月後でも住宅業務などの新たな仕事で忙しく、振り返る余裕なく、バーナウト気味になる。そして、業務の見直しがおこり、非常時に発揮した能力による評価の格差があらわれ、職種変更があり、新しい仕事を覚える必要が生じた。このような中で時間外勤務が多くなり育児に支障が生じた。非常時能力、新しい能力などの重要性が指摘されているが、今後、それがどのような具体的能力であるのかを見極める必要があろう。

（心の整理）
b震災　　油断　　事前準備　　＊災害は起こる
d震災　　春はもう来ない　　絶望　　＊絶望感処理
i風景の喪失　　心に穴があく　　価値観再形成　　時間がかかる　　＊長いケア
＃現在の心境
＋忘れたい、考えたくない、整理できない・2人、考える暇ない、　＊未整理
＋申し訳ない・4人、反省しきり、問い直したい、　＊過去・後悔
＋家族有り難い・3人、上司に感謝、職場の人に感謝、激励嬉しい、　＊現在・感謝
＋二度と起こって欲しくない・2人、これから不安、　＊未来
今度は援助したい、　＊相互援助

油断があった。「災害は起こる」と考えての事前準備の必要性が指摘されている。が、「春はもう来ない」「心に穴が開く」など、絶望感に襲われており、心の整理に時間がかかることが示唆されている。このことを反映して、約九ケ月後経っても未整理状態の人が目立つが、「申し訳ない」とする後悔の念、家

族・職場の人などへの感謝の気持ちが交錯し、未来へ不安を持つと同時に「二度と起こって欲しくない」と願っている。ここには、一応の過去・現在・未来の時間展望があるが、それを有効なものにするには共有化された目標がいり、相互援助が重要なものとなる。

#帰属理論的整理				
e運	運	天災を恨む	運が悪い	＊運で諦める
z国との関係	外部環境	国勝手な指示	自主判断体制	＊地域自立
zノウハウ	外部環境	ハード崩壊	ソフト充実	＊防災ソフト
h人災的側面	能力	天災と言えぬ	知性・意思の発揮	＊能力発揮
z管理能力	能力		非常時判断	＊危機管理能力
z経験通じず	能力	自信喪失	ここからスタート	＊自分の能力
z人間関係自身	努力	執着心消える	語り継ぐ努力	＊努力

過去・現在・未来の時間展望がある時、我々は自らの行動・状態への理由づけを行う。帰属理論的に整理すると、「天災として諦める（運)」「国の勝手な指示（外部環境)」「危機管理能力（能力)」「語り継ぐこと（努力)」と、帰属理論での全ての類が当てはまり、様々な原因帰属の仕方をしたことが分かる。このことは震災においては単一の帰属が起こるのではないことを示しているから、今後、どのような帰属の展開が起こるのかを検討する必要がある。

6）心身ダメージと克服

起こった事→	（喚起された気持）	―――――→結論 問題	解決行動	教訓・目標
z生理ストップ				
z高熱	逃避的気分		夫・子供の顔	＊家族の支持
z一ケ月後不眠			点滴	＊医療
z余震恐怖		潜在化		
z当初	気合い	落着いてガタ		＊非常時の確認
z表現出来ず		能力限界		
zいつまで続く	不安		早く過ぎて	＊時間による解決
zやれない				＊流れに任せる
z発散	やめたい		映画、美術鑑賞	＊リフレッシュ
z家を建てる				＊前向き発想
#価値観				
i価値観		価値観崩壊	一人一人の努力	＊オンリーワンの神戸
h思想		ニーチェ	悪魔を飲込め	＊個の確認

z 宗教			般若心経	＊宗教
＃他者との関わり				
z 友人の死	辛い	心理的混乱	違う世界だ	＊異常性の受容
z 友人の死	見舞えず	罪悪感		
z 友人		気分動揺	友人の電話	＊カウンセリング
z 思い交錯	涙		同僚と過ごす	＊仲間の確認
z 仲間		孤立	抱え込まない	＊声を掛け合う
f 直接被害なし	お気の毒	第三者的	一人では生きれない	＊被害差越える
g 知人の援助	感謝	女の友情	神戸で同窓会を	＊復興の確認

生理ストップ、高熱、不眠などの体調変化に加えて余震恐怖の潜在化、気が張る時期が終わってガタが来、どうすれば良いのか分からないといった状態にある。こうして「時間に身を任せる」とするが、その根底には「不安、やめたい」などの気分があり、家の再建、映画観賞などによる発散でその克服を試みている。これらが示していることは「個の確立」、自立だが、そのために思想・宗教によって価値観を再形成しようとしている。さて、我々の「個の確立」は他者、ことに身近な人々との関係が重要である。友人の死は大きな衝撃を与え、混乱させたが、友人からの電話はカウンセリングともなっている。このことから「孤立感を一人で抱え込まない」よう声を掛け合って仲間の確認をし、被害差を越えて、女の友情を発揮して、将来復興の確認が出来る同窓会が開けたらと願っている。全体的にいえば他者との交流によって、ダメージを克服しようとしている。が、そのためには「被害差を越える」という大きな課題がある。そのためには「震災とは何か」「自分とは」「友とは」といった震災文化にかかわる極めて根源的な問題を十分に考えていく必要があろう。

考 察

地震直後の状況は公務員も被災者であったことを如実に示している。が、震災場面での行政の役割は非常に大きい。ゆえに個々の公務員の心に「出勤か欠勤か、家族か仕事か」の公私間葛藤が生じた。32名中14名が本震当日出勤し、震災時勤務に就くが、出勤には家族、地域、知人などの協力が不可欠で、様々な工夫をしつつ出勤するが、職場もまた呆然とするほどの大きな被害を受けた。職場は混乱し、何をすれば良いのか分からない、危機管理が不十分な状態で職

員の安否確認と出勤要請をしつつ、大量の震災業務を無我夢中で行うが、専門能力を要する仕事への対応、震災時業務のための組織体制づくりなどに多くの準備不足が露呈した。防災指令に基づく宿泊勤務などが必要となるが震災前の縦割り型組織がそのまま機能し、性差、部門にとらわれないなどの個々人のマンパワーに注目し、配慮した非常時体制を組むことはできなかった。このための工夫として全体を見通す役割の人を置くことが提起されているが、情報機器ダウン、大量業務などが生じ、必ずしも十分に機能したとは言えない。この教訓を体系化して活かすことが今後の防災に必要だが、九ケ月後の時点ではまだなされていないといえる。かかる手探り状態での非常時勤務は多忙を極め、当然公務員個々人のストレスを高め、生理的な変調の自覚につながり、ハイな気分、怒り、喪失感、絶望感、疲労感などを生じさせ、バーナウト気味になった。個としての自分に気付く心の整理を様々に行うが、同時に、多くの援助者への感謝の気持ちも生じ、家族、仲間との協力をもとに今後の防災に取り組む気持ちを喚起した。以上のようなことがごくおおまかには起こったといえる。が、結果を通覧してみると、「家族」における復興活動についての記述数が「職場」に比して少ない。これは本資料の被調査者が管理職公務員であり、そのことを意識して書かれたためと考えられる。このような制限があるとはいえ、本資料の記述には震災時の組織についての重要な提案がある。そこで結果の教訓・目標に示されたことを参考にしながら組織活動の視点から私なりにまとめてみよう。

＊三種の組織

本資料は本震後約九ケ月ほどの時点で書かれたものである。具体的な対応策は体系化されてはいないが、いくつもの貴重な提言が含まれる。

（危機場面介入型組織）地震直後でいえば応急防災、被災確認、連絡、救出、避難、恐怖処理、家庭内備蓄の重要性が指摘されている。これらの実行の中心は被災者個々人にあるが、大規模災害の場合、いずれも個人の手に余ることが生じる。救命、消火などがその典型例だが、その緊急出動は不可欠である。が、被災した地方公共団体からの要請を待っては手遅れとなる。震災時点では地方

公共団体の従来のテリトリーは消えたと考え、援助する側独自の判断で緊急出動すべきである。これは被災地およびそれ以外の地域を緊急に危機管理する組織の必要性を示唆する。この組織が対応するのは非日常的な危機状況であり、震災前の日常的組織とは異なり、危機的状況をのり越え、日常的組織につなぐことを任務とする危機場面介入型という性格を持つ。しかし、阪神・淡路大震災のごとき大災害はしょっちゅう起こるわけではない。このことはすべての地方公共団体がこの種の型の組織を持つことの非効率さを示すが、一方、大災害は何年かの間には必ず起こる。ゆえに、従来よりも大きな地方単位ごとにこの型の組織を準備することが望ましい。そして、この種の組織が行う活動内容は救命、消火などに限定すべきである。というのは無限定な活動領域・時間を認めると極めて大きな力をこの組織が持つことになるからである。

（並列型多層組織）これは、この危機場面介入型組織の活動を地域ごと、公共団体ごとの組織が引き継ぐことの重要性を示すが、公的組織の、それまでの縦割り型組織では無理である。なぜなら遺体業務、社会的弱者救援、物資配分など、大量の新しい業務を極めて短時間の間に遂行しなければならず、数多くの市民、ボランティアの協力が不可欠だからである。ここでは全体を見渡す役割を持つ機能が重要で、さらに震災後の被災地の事態は次々と変化するがゆえに、この役割の重要性は一層増し、次に何が必要かを予測する、見通す機能も必要となる。公共団体に設置された対策本部が担うべき役割は、この見渡し、見通す機能を持つことだが、刻々と変化する事態に対応するには、それを担う組織も柔軟な構造を持っていなければならない。かかる組織構造は硬い縦割り型組織には無理で、タスク・フォースのプロジェクト・チーム的性質を持っていなければならない。ここからマンパワーの活用が不可欠となるが、その人材は公務員に限定することはない。なぜなら公務員もまた被災している可能性があり、市民・ボランティアなどから必要な能力を持つ人を活用しなければならない。つまり、新しい非常時組織を構成する必要性が生じているのである。さて、この組織を動かす組織原理は工場部門などで採用される縦割りの直列型ではなく、営業部門的な水平・並列型でなければならない（直列型と並列型については藤

田1996参照)。というのはそこで必要とされる業務は医療など専門知識を必要とするもの以外、そこにいあわす誰でもが行い得ることが理想的だからである。といって個々人がばらばらに行えばよいのではない。変化する事態を見渡し、見通した業務リストに従うことが望ましい。ここから全体を見渡し、業務リストを用意するコーディネート機能が重要となる。地域ごとに、いわば水平的に配置された各コーディネーターは自らが担当する地域、施設において非常時業務を役割分担し統合する機能を果たすが、一方、他の地域、施設と連絡を取り合ってその動きを摑まなければならない。なぜなら、そこから次に必要となる業務への見通しが得られ、業務リストをより有効なものに改善できるからである。ここからコーディネーター間のコミュニケーションが必要となり、こうして水平的・並列型集団が多層的に重なる組織ができる。これを並列型多層組織と名付ける。

（公的組織）この並列型多層組織の活動はボトム・アップ的で地域ごとのコミュニティ活動の中心を担う。それゆえに区役所職員などの公務員、教員、自治会、婦人会、ボランティアなどによって構成される。が、参加者の大部分が被災しているがゆえに自前でそこに投入しうる資源には限界がある。ことに人材面での限界が生じるから、宿泊、食事、ローテーション、出勤方法などの工夫をしつつ、個人能力に応じた人材の確保をする必要がある。そして、人材面に加えて物資・資金面での限界も生じる。もし、これらの限界をそのままに放置すれば地域格差、施設格差、市民格差が生じる。その是正を担うのが公的な役割を担う組織、地方公共団体である。公共団体にはもともとその責任があり、必要と考えられる場に、新たな人材、資金などを投入する役割がある。そして、この責任と役割を震災時に個々の公務員は感じたがゆえに「仕事か家庭か」の公私間葛藤を体験し、「行政職とは」の疑問に悩んだのである。その悩みは並列型多層組織のコーディネーターからの要望をすべて聞き入れる資源の余裕がない時にはより深くなる。大震災とはまさにかかる資源不足が生じる事態である。ここから種々の要望に優先順位をつける必要性が生じる。ここに人材の確保、業務体制づくりに加えての管理職の役割がある。例えば、震災直後、救命

・救出業務、消火業務、遺体業務などが真っ先に行われ、次いで安全な場所への避難誘導、そしてライフ・ラインなどのの確保による日常生活の安定化が行われ、被災地の復興を目指してのマチづくりなどの市民参加の促進がなされ、ようやく新たな市民として復活する。これは時間経過における最も大きな優先順位の変化を示したもので、この流れを被災した市民に付けられた社会的ラベルで表示すれば以下のようになる。

市民→〈地震・被災〉→被災者→〈避難〉→避難者→〈生活〉→個人→〈参加〉→市民

〈　〉で表示したのは社会的ラベルを変更した媒介項であり、〈地震〉以外のすべては、いわゆるノウハウである。その適時性、優劣性が復興過程を促進するか否かの決め手となる。かくしてこのノウハウの改善と蓄積、およびそのシステム化が地方公共団体などの公的組織にとっての課題となるが、その考え方については藤田（1996）を参照いただきたい。

＊震災カルテ

さて、本論で使用した資料に「みんなが管理職、事務所ごとの判断、自己完結システム、権限委譲、」といった提言があるが、最も多いのは情報に関わる提言である。「断片的情報しか入らない、情報機器が使用できない、使用できるようになると大量情報になり整理できない、情報の重要度が判定できない」などなどの問題点が指摘されており、情報網構築と情報判断に大別出来る。この両者が機能して始めて適切な意思疎通のある情報処理が行い得るが、そのためには全体の活動状況を把握することが肝心で「全員一部屋制、遊軍設置、庶務担当活用」などが具体的に提案されている。が、膨大な震災業務を行わねばならないがゆえに、出来るだけコミュニケーションのロス、ギャップが生じない工夫がいる。例えば、震災カルテの作成と伝達である。震災カルテとは一定の様式に従って、問題点を列挙した上で現状を診断し、それを改善するためにうたれた具体的な対応を記したものであるが、それらを被災者個人ごとに、家族ごとに、施設ごとに、地域ごとに、といった多層性を持って作成する。この

作成には先に述べた並列型多層組織の協力が必要である。この協力関係を通して並列型多層組織から公的組織への引継ぎが可能となるが、震災カルテの引継ぎは危機場面介入型組織から並列型多層組織へもなされなければならない。つまり、震災カルテがフォロー体制の構築に重要な機能を果たすのである。が、その内容については今回の震災に関与した人々が得た教訓を参考に体系化することが必要である。

＊応報性

かかる試みをすることが、震災の教訓を次に活かすことだと考えるが、ここで留意しておかねばならない点は、みんなが「被災者・被援助者という立場から個々の自立した市民」へと被災者個々人のニーズが変化することである。地震後約九ケ月での本資料では、この点についての公組織的な提言は不明確だが、被災した公務員個々人という視点から考えてみよう。身体的ストレス（生理ストップ、不眠、高熱)、精神的トラブル（余震恐怖、ガタ）などの変化、落ち込みが二ケ月後には顕著に出ている。一人一人の健康がまずは出来るだけ確保されねばならない。なぜなら、継続的援助は自立した人によってしかなしえず、公務員にはそのことが最も求められるからである。この意味で「応援体制」は不可欠であり、それまでの公共団体の組織は再編されねばならない。そして、個々をコア組織とした上で、被援助者の立場に加えて援助者の立場にも立ち得る人の人数を段々と多くしていくこと、つまり、「市民を巻き込む」ことが必要となる。

が、この両者の立場の並立状態はいわば葛藤状態であるがゆえに言葉ほど簡単ではない。しかし、まさに震災時の公務員はこの葛藤事態に入らざるを得なかったのであるから、その体験を通しての提言は個々人の自立という事柄に関して極めて示唆的なのである。かかる意味で本資料において現れた心の整理、帰属理論的整理などを考察してみよう。天災だと「運として諦める」がまずあるが、藤田（1996）は、ある段階で「諦めることに飽きる」事が起きることを見出だした。つまり、「諦める」ことを継続することは極めて困難なのである。そして国、行政、社会などの外部的社会環境への怒りとして表現するが、同時

に「油断」していたことの後悔の念も自分の内に起こる。が、これらはいずれも過去に対する評価であり、我々は過去の状態のままで生き続けることは出来ない。こうして、未来への試みを志向するが、その端的な表現が「ここからスタート」である。そして、「意思、危機管理能力」などの重要性を指摘し、「防災ソフト」「語り継ぐ努力」の必要性を提起している。ここには一回切りの整理、帰属が行われるのではなく、繰り返し起こることが示されている。

このような繰り返し性がある場合、我々にはそれを支える構えがいる。というのは例えば「友人の死」などを契機としての罪悪感、心理的混乱があり、その中で「流れ・時間に身を任せる」と「リフレッシュする」、「家を建てる」などの「新たな目標を持つ」といった受動・能動の正反対の構えが起き、その度に整理・帰属が揺らぐからである。が、この揺らぎの中で「個としての自分の確認」が生じる。そして、この孤独感をまとう自己確認が他者の確認、家族・職場・地域への感謝、仲間との連携を生み、被災差を越えて他者と共有する「オンリーワンの神戸」「次は援助する番」という夢の実現を願う応報的な構えを生み出す。この応報的な過程が働いてこそ「春はもう来ない」「穴の開いたこころ」が示す絶望感の処理が始めて可能となるだろう。というのは、間違いなく震災の復興は一人ではなし得ないからである。この意味で家族の持つ意味は大きい。そこで、家族に焦点を当ててみよう。当然ながら、地震直後では家族中心で、子供を救い、地震後壊れ、散乱した家を片付け、食事を工夫して用意する。「クビ覚悟、後ろめたさ」を感じながら欠勤し、「出勤すると気が楽」になるが、家族介護のため「日勤すると孤立感」に陥る。夫、親、子供などの協力を得て出勤するが、震災時業務はつらく、「子供と話すことを精神的支え」とする。が、時間外業務が増え、育児に支障も生じた。このようなことから「逃避的気分」が起きるが、なんとか家族の支持で持ちこたえる。整理すると、これぐらいの短い文章になるが、被調査者が公務員として働くことの大きな支えに家族がなっていることが分かる。が、そのことを家族がどのように考えていたのかについては分からない。この点については別の資料を分析する必要がある。

本論では女性管理職公務員の手記をもとに震災後に必要となる組織を、危機場面介入型組織、並列型多層組織、従来型公的組織に分けて考察した。そして、そこで働く公務員からの提言を私なりにまとめたが、教訓・目標を達成するための具体的行動は当然ここで記述されたものだけではなく、幾種類もの被災市民の立場からの資料などからよりたくさんの解決行動を抽出し、いかなる行動がもっとも適切かを比較検討し、震災時での行動マニュアルを作成する必要がある。本分析で示すのは、そのための一つの手掛かりであるが、より有効な行動マニュアルを実際に比較検討する、いわば「現場・研究協力組織…藤田1997参照」の設置が切に望まれるのである。

【参考文献】

藤田　正 1993 日本人の家族主義神話　「われわれ」の社会心理史・私試論
心理学評論 36、3、425-459
藤田　正 1996 別れ事例　阪神・淡路大震災　私論　被災者の心理　ナカニシヤ
藤田　正 1997 被災者として阪神・淡路大震災の被災体験から学んだこと
大阪女子大学人間関係論集 14、27-69
三戸　公 1982 家と「公と私」　欧米との比較において　年報社会心理学 23、41-62
田尾雅夫 1990 行政サービスの組織と管理　地方自治体における理論と実際　木鐸社